ゆずにっき ＥＸ１
～はじまりの夜想曲～

執筆：たいらひろし様
挿絵：ＳＵＫＥ様／しかしょみん様
原案：ヒュー（箱庭遊戯）

午後五時。
学校を終えた子供たちが自宅や公園で遊んでいるこの時間、柚姫は自宅のキッチンで夕食の下ごしらえをしていた。
今日のメニューはシチューとはちみつパン、それにおひたしともやしの味噌汁。あと一時間ほどで仕事を終えて帰宅する柚姫の父が好きな献立だった。
父子家庭で生まれ育った柚姫にとって、炊事や洗濯をこなすのは当たり前のことだった。父さまはお仕事で忙しいから、娘である自分が父さまのお役にたつのは当然のことだと柚姫は思っている。なにより、柚姫は父さまの奴隷なのだから。
踏み台に乗って背伸びをしつつ包丁を操る柚姫の手さばきは、一年前と比べるとだいぶ上達していた。同年代の子はいまごろゲームや部活動に興じているだろう。柚姫はみんなより、少しだけ早く心身ともに大人になった。
首には奴隷用の首輪を巻き、衣服は父さま好みのエッチで、かつ動きやすいピンク色のカジュアルドレスを身にまとっている。
今日のテストではいい点を取れたからエッチなお仕置きは免除されるだろう。いつだったか、お皿を割った罰として大人用のオモチャをアソコに入れたままの生活を強いられたことがある。あれは少し気持ちよかったけれど、やっぱりきつかった。股間から漏れてくるバイブの駆動音をいつクラスメイトたちに聞かれるかと思うと生きた心地がしなかったものだ。その夜の父さまへのご奉仕はいつも以上に熱が入ったけれど、本当のところ、まだエッチなことをするのには抵抗があった。だってまだ柚姫の年頃の少年少女たちはキスをした経験さえあまりないだろうから。
ニンジンとじゃがいもを刻んでお鍋に入れ、もやしの味噌汁に火をとおしたところで玄関のベルが鳴った。父さまが帰宅する時間にはまだ早いし、そもそも父さまはベルを鳴らさない。
誰だろうかと思いながら柚姫が玄関のドアを開くと、可愛らしい少女が玄関前に立っていた。
初めて見る顔だった。
色素の薄いツインテールが黄昏の日差しを浴びて銀色に煌めいている。細面の輪郭に端正な顔立ち、やや低めの身長は柚姫と同い年くらいのようにも思えるが、落ち着いた佇まいや理知的な瞳は大人の女性のようでもある。
胸元の大きなリボンが特徴的な青色を基調としたセンスのいいワンピースを身にまとい、背筋を伸ばして控えめな胸の前で両手の指を組んだ少女は、初対面のはずの柚姫に対して臆せずに声をかけた。

「失礼します。ここはパパさまのおうちで間違いないかしら」
「パパ、さま？」
いきなりなにをいっているのだろう彼女は。
きっと家を間違えたのだと思い、
「あの。どこか別のおうちと間違えてない……ですか？」
「そんなはずないわよ。えっと……」
ふと少女は憮然とした表情になると、柚姫の家の表札をちらりと流しみてから「やっぱり間違いない」と呟き、次に柚姫の父親の名前を口にした。
「はい、それは父さまの名前なのです」
と柚姫が答えると、少女はほらみなさい、とばかりに勝ち誇った笑みを浮かべた。
「あなた、パパさまの娘さんね。お手紙で伝えていたとおりパパさまに会いにきたの。まだパパさまはお帰りではないみたいだから、中で待たせていただいても構わないかしら」
そういうと少女は柚姫の許可も取らずに玄関先へ入り、童話のようにメルヘンチックな形の革靴を脱いだ。
柚姫がぽかんとしつつあとを追うと、すでにリビングまで上がり込んでいた少女は不躾な視線を室内に投げつけていた。
広いリビングの中央にはシックで大きいサイズのソファーが設置されている。壁際には大きなテレビとブルーレイレコーダー。柚姫の趣味で買ってもらったクマのぬいぐるみがソファーのうえで不思議そうな視線を少女に送っている。鮮やかな赤色のカーテンは閉じられておらず、窓から漏れる夕焼けがふたりの少女を紅く照らしていた。
「きれいなお部屋ね」
そういうと彼女は柚姫を振り仰いだ。腰に手を当てて胸を張るその仕草は、西洋のレディを彷彿とさせた。
「わたくしは千月（ちづき）。あなたのお名前をうかがってもよろしいかしら」
「え？　えっと……わたしは、柚姫です」
「あなた、パパさまの娘さんよね」
「あの、パパさまって……？？」
「パパさまはパパさまよ。あなたのお父さんであり、わたくしのパパでもあるひと」
「えっ……」
絶句する柚姫。父さまが、そんな。自分以外にも、父さまに子供がいたなんて。
混乱する柚姫を面白がってか、千月は薄い唇を三日月の形に細めて、
「あなた、パパさまからなにもきいていないの？　パパさまには手紙を差し上げたのだけれど。今日、この時間におうかがいすることもお伝えしておいたのに」
「……はい。父さまは、なにも。千月ちゃんはどこからきたんですか？」
「遠くからよ。だけれど、当分はこの土地で暮らす予定なの。よろしくね、柚姫ちゃん」
そのとき、玄関のドアが開く気配がした。そして、ただいま、という男性の声。
「……！」
刹那、千月は目の前にいる柚姫の存在など意識から消し飛ばしてしまったに違いない。即座に椅子から立ち上がるや、瞳をらんらんと輝かせて玄関まですっ飛んでいった。ほほを紅潮させる少女というものを、柚姫は初めて目の当たりにした。
呆気にとられつつ柚姫が千月のあとを追うと、玄関で異様な光景が展開されていた。

千月と名乗った少女が玄関のカーペットのうえで片膝をついて頭をたれていた。
「先だってお送りしたお手紙に書きましたとおりです。初めまして、パパさま。あなたさまの千月です」
さきほどまでの高慢なイメージはどこへやら。千月は西洋騎士のごとく、柚姫の父に対して上品な一礼をしてみせていた。
呆然とする柚姫とは対照的に、父さまはすべてを理解しているかのごとく千月に頭をあげるように命じ、遠路からの一人旅を労う言葉をかけると靴を脱いでリビングへ向かった。
作りかけのシチューの香りが漂うリビングで、柚姫と父さま、そして千月と名乗る少女がローテーブルをはさんで座っていた。
姿勢よく正座する千月とは対照的に、柚姫はおろおろと視線を彷徨わせている。
父さまはそんな自分の娘へ小さなため息を漏らすと、なぜテーブルの上になにも乗っていないのか、と小言をいった。
「へ？　あ、ああっ、お茶でございますね。も、申し訳ありません、父さま。すぐに用意してまいります」
慌てて立ち上がる柚姫を半眼で射すくめた父さまは、あとでお仕置きだなと呟いてから、小さな来訪者に向き直った。そして、改めて彼女の身の上について問いただした。
「ご挨拶いたします。わたくしは千月と申します。母からの紹介で、あなたさまの性奴隷にしていただくべく訪問いたしました」
それを耳にした柚姫の衝撃は深かった。
震える手で三人分の湯呑を差し出す柚姫を尻目に、千月が言葉を続ける。
「あなたさまのことを深く愛していた母に代わって、わたくしがあなたさまに奉仕させていただきたいのです。あなたさまの性奴隷にふさわしいか、テストをしていただけますか。このときのために、エッチの技術を一渡り身につけて参りました。わたくしはまだ清い身体でございます。もしも……あなたさまにご満足いただけたときは、この千月にあなたさまと一緒に暮らす許可をいただけませんでしょうか」
「い、一緒にって……千月ちゃん。父さま、これはいったいどういう……」
口を挟もうとした柚姫を咎めるような父さまの視線。
これ以上なにもいえなくなった柚姫は、顔を俯かせて黙り込んだ。
柚姫には一言の説明もなく新たに性奴隷を増やすというのだろうか――いや、柚姫は所詮、父さまの性奴隷なのだから、父さまの決定に口を挟む権限など持っていない。けれど、柚姫と父さまのほかに家族がひとり増えるというのは、柚姫の生活にも変化が生じるということだ。父と娘の愛の巣にもうひとり家族が増えたら、わたしたちの生活はどうなるのだろう――と柚姫の胸に小さな不安が生じた。
千月の母が父さまのことを愛していたそうだが、その娘である千月ちゃんがどうして父さまの性奴隷として志願しているのか。わからないことだらけだった。
スーツ姿でソファーに深く腰をかけたまま、父さまは考え深げに腕を組んでいる。そこへ千月がセールストークを重ねた。
「わたくしのすべてをあなたさまの自由にしていただいて構いません。まだ身体は小さいですが、あなたさまがお望みであればすべてを差し出す覚悟は出来ております。家事も一通りこなせますのでメイドとしてお仕えすることもできますし、もちろん夜のお世話もお相手させていただきます。そう、あなたさまがお望みであれば……」

その言葉に背中を押された父さまは、まんざらでもなさそうに頷いた。
彼はソファーに腰をかけたまま、おもむろに靴下を脱いでから自分のスーツのズボンのベルトを外し、チャックを下ろした。
それは、いまこの場で性奉仕をしろ、という意味にほかならなかった。
柚姫が思わず赤面してしまうようなこの状況で、しかし千月は華やいだ声音で感謝の言葉を述べる。
「この千月をテストしていただけるのですね、ありがとうございます！　……あ、あの。もし差し支えなければ、あなたさまのことを、パパさま、とお呼びしても構いませんか」
父さまがその具申を承諾すると、千月の顔に可憐な花が咲いた。嬉しげに目を細めつつ、少女は父さまの足元に跪いた。
「ありがとうございます、パパさま。あなたさまの千月です。わたくしのすべてはパパさまのために」
千月は最愛の男性の裸足のつま先にキスを落とした。命じられるまでもなく、神に身を投げ出す信徒のような自然な仕草で父さまに畏敬の念を捧げている。父さまはなにもいわず、奴隷と化した少女の挙動をうかがっていた。
彼女はつま先への口づけを徐々に上へと移動させていった。父さまの足首からすね、ひざ、そして太ももへと、餌をねだる犬のような様子で舌を這わせていく。一見するとプライドの片鱗さえ感じられない彼女の行動は、しかし見方によっては主に忠誠を誓う騎士のようでもあった。
まだ背丈の低い少女には似つかわしくない奴隷のような振る舞いが、父さまの劣情を刺激したのであろうか。露出された男性器がむくりと重たげに顔を起こした。
千月の唇がとうとう父さまの局部へと迫りつつあった。
あと少しでおちんちんと接吻が交わされる……かと思いきや、そこで千月はふと顔をあげた。
「パパさま。あなたさまのおちんちんに触ることをお許しいただけますか」
なにをするにおいても、まずは許可を取る。
千月はすでに、骨の髄まで奴隷教育を施されていた。
いま千月の前でソファーに座っている殿方のために生きるようにと日頃より母から教育を施され、道具を模擬相手に性技の練習を積み、男性を喜ばせる術ばかりを身につけた――健気な、そして孤高な少女がそこにいた。
父さまが首を縦に振ると、千月は恐る恐るといった様子で男性の象徴に手を触れた。
「男性はここをこうするとお悦びになると、母から教育されました。なにぶん初めてのことですので、粗相がございましたら容赦なさらず、ご躾をお願いいたします。殿方のおちんちんを間近で見るのは初めてでして、緊張いたしますわ……」
千月は震える手で父さまのペニスを慈しむようにさすり始めた。実物を手にするのは初めてであるものの、彼女の手つきは熟練者のそれであり、初めこそ戸惑いを見せていたものの、すぐに平静を取り戻して肉棒を上下にさすりだした。
少女の細指が父さまの象徴を滑らかにマッサージしていく。その手馴れた仕草に快感を覚えるのか、父さまが時折、裸足のつま先をぴくりと痙攣させていた。
「パパさまのおちんちん、温かい……それにお固いですのね。とくんとくんと脈打って、まるで心臓のよう」
千月は自分の口からよだれを落とし、親指と人差し指で父さまの亀頭を摘んでクリクリと摩擦させ始めた。彼女は絶妙な力の入れ具合で男性のもっとも敏感な部位を繰り返し擦りあげる。

呆然とした面持ちで立ち尽くす柚姫を、千月は流し目で観察していた。父さまが柚姫に退出を命じなかったのだから、柚姫がふたりの口淫を見届けることに不満はなかった。

一渡り指先での愛撫を実践した千月は、いよいよ自らの唇を男性器へと触れさせた。

千月は父さまにご奉仕を施すあいだに自分のスリットに左手を添えて、クリトリスを指先で擦っていた。小粒な肉豆の皮を爪で器用に剥いて、自らの鋭敏な粘膜をさすり続ける。彼女の口と、そして桃色のひだから粘っこい水音が響き始めた。

「んうっ」

千月の華奢な背中が仰け反り、膝が震える。自慰行為によって与えられる甘美な電気信号に、少女の肉体が自然と反応してしまっているのだった。

「申し訳ありません。千月はご奉仕の最中に自分のおまんこをいじって感じてしまうはしたない娘です。お許しください。パパさまを思うだけで、こんなになってしまいました」

そういって千月は父さまのペニスから口を離し、フリルをあしらったスカートをたくしあげた。

膝立ちのまま大きく開かれた彼女の股ぐらから垂直に滴り落ちる透明な愛液に、柚姫は目を奪われた。

千月は、下着を身につけていなかった。

彼女の秘裂から滴る透明な愛液の量は、柚姫とおなじ年頃の少女のものとは思えなかった。まだ身体の熟れていない柚姫にとって、愛液の分泌が少ないことは悩みの種である。しかし千月はこの年齢にして十分すぎるほどの潤いを、その桃色の花弁に湛えているのだった。父さまを受け入れるため、赤ちゃんを作るための器官で深く愛せるように開発の済んでいるメスの肉体。リビングのフローリングに、少女の体液が水たまりを作っていく。

父さまが、満足げにうなずいた。

己の娘とおなじ年頃の少女から性的刺激を与え続けられた父さまのおちんちんがさらに膨れ上がり、大きく反り返った。彼の男性器はいつでも少女の純潔を散らせられるほどに猛り狂っている。

取り残されたような面持ちで成り行きを見守るだけの柚姫を尻目に、父さまは千月にソファーへ寝そべるように命じた。

千月はスカートをたくしあげたままうやうやしく一礼すると、ほんの少しだけ視線をさまよわせてからソファーへと横たわって、シャツとスカート、それにリボンを身にまとったまま脚部のみをさらけ出し、犬が降参するようにお腹を見せて仰向けになった。そのかたわらに父さまが腰を下ろし、少女の素肌をじっくりと拝むべく、背もたれに体重を深く預けた。

薄いスカートの向こうから現れた染みひとつない少女の肌が夕方の肌寒い空気に晒された。父さまの不躾な視線に晒された乙女の肢体は、緊張のためか汗ばんでいるようだった。

ほんの少しだけためらう仕草を見せたあと、M の字に折り曲げられた千月の両足がおもむろに開かれていった。

スカートの下から覗く千月の縦一文字には、思春期の象徴である産毛が生えかけていた。

「パパさま、ごらんくださいませ。生娘の処女膜です。あなたさまへ捧げるために大事に育んできた、あなただけが摘み取ることのできる乙女の蕾です。女の子の一番大切なものを、女の子が生涯に一度しか捧げることのできない純潔を、どうぞその逞しいモノでお受け取りくださいませ」

千月は人差し指と中指を上手に使って、すでに甘い蜜を垂らす己の花弁をゆっくりと左右に広げた。薄い桃色の肉襞が恥じらうようにして、その蕾を開花させる。

ぱっくりと割られた彼女のスリット――小さな尿道と菊座。まだ皮の剥けていないクリトリス。そして膣口――その入口に、薄い肉膜が確かに張られていた。純潔の証――処女膜である。

父さまがおもむろにソファーから腰をあげた。
彼は挑発的なポーズをとり続ける千月に覆いかぶさるようにして、正常位の体位をとった。男性の逞しい肉体に組み伏せられた少女は、本能的に生唾を飲み込んだ。
父さまは愛液を擦りつけるようにして彼女のスリットに沿わせて屹立の尖端を前後に摩擦させた。皮をかぶったままの陰核に亀頭が密着し、少女の敏感すぎる性感帯にぐりぐりと押し付けられる。
しばらくクリトリスを弄んでいたペニスの尖端がじわじわと下へ降りていき、蜜に溢れる花弁の中央で静止した。
不安と緊張とで父さまから目を逸らしかけた千月に父さまは、目を逸らさぬように命じた。
父さまからの命令を受けた千月は、これから自分の純潔を散らす男性の目をしっかりと見据えた。互いの目を見つめ、体温と息遣いを感じあう――最初にして唯一の男性の存在を心に焼き付けるための儀式である。
父さまが動き出した。
欲望のまま充血した剛直が少女の処女地を押し広げ、みちみちと痛々しげな音を立てて侵入していく。
「はうっ……ううううっ」
千月が苦しげな声をあげた。
父さまの挿入は容赦なく千月の処女地を侵攻していった。千月が習熟しているのはあくまで指使いや舌の運びといった小手先の技術のみであり、ここから先は彼女にとっても未知の領域であった。膣の締めつけや腰の動きといった実技までは至っておらず、聞きかじった知識のみでやりくりしなくてはならなかった。覚悟を決めたひとりの少女が純潔を奪われる瞬間から、柚姫も目を逸らすこ

Illustrated by ＳＵＫＥ様

とを許されなかった。
乙女の処女膜は頑固に剛直を押し返し、男性の侵入をよしとしなかった。締まりをよくするという意味では父さまにとって幸運であろうが、破瓜の激痛に苛まれる千月にとっては不幸の極みである。少女の膣粘膜はラブジュースで濡れそぼっているため滑りこそするものの、薄い肉膜ひとつに阻まれてなかなか挿入にまで至らない。そうでなくても千月の小さな肉体にとって大人のペニスは大きいのだ。
しかし、その抵抗もあと一息で根負けするところまできていた。いまや父さまの亀頭は千月の膣口に隠れてしまうほどに埋まっている。
「あっ……痛ぁい……」
父さまが腰を押し出すたび、痛みによる脊髄反射で千月が腰を下げようとする。業を煮やしたのか、父さまはそんな彼女の太ももを両腕で固定させると、容赦の片鱗さえ見せずにトドメとなる腰のひと押しをした。
ぼつっ、という鈍い感触。
千月は感じた。自分の下腹部でかけがえのないものが破れ、永遠に失われた痛みを。じわりとした熱が幼い膣肉に溢れ始めた。一生に一度だけ味わえる、破瓜の瞬間。
「ああ……パパさま。いま、わたくしはパパさまとひとつに……ああああっ」
千月は感慨にふけることさえ許されず、父さまの淫欲の赴くままその細い肢体を揺さぶられることとなった。
母の教えに従い、父さまに尽くすことを至上の幸せとする少女は〝パパさま〟と崇める男性のしたで喜悦のときを迎えていた。ゆらゆらと揺り篭のように揺さぶられながら、千月は身を貫く苦痛のなかに女としての喜びを見出していた。
父さまの肉棒は肉膜を突破したあとも怯むことなく突き進んだ。初めて異物を迎え入れた少女の肉壁が痛いほどに男の象徴を締め付けてくるが、彼は意に介さずますます雄棍を没入させていく。少女の秘壺がミチミチと粘着質な音を立てて男性に侵入を歓迎した。
抽送を繰り返すうちペニスが徐々に奥へ奥へと肉を分け入っていき、やがてペニスの尖端が千月の最奥に接触した。父さまのおちんちんの三分の二が千月のおまんこに埋没しているところを、柚姫は取り残されたような心境で見つめていた。
柚姫にとって、実の父親が自分以外の女と生殖行為をおこなっている光景を見るのは初めてであった。
柚姫は父さまがお望みであれば自分の友人を紹介することも厭わないつもりだし、その子を性奴隷として引き込む決意も固めたつもりであった。しかし、実際に父が自分以外の女性を抱いている姿をみると、胸の奥に重いシコリを感じるのはなぜだろう。
「うう……パ、パパさま。どうぞ、千月のおまんこをお好きにお使いくださいませ。このおまんこは、あなたさまだけのものでございます」
健気にも千月は両足の付け根に力を込め、処女を失ったばかりの雌穴を締め付けようとした。男性器を膣内へ向かい入れるのは初めての経験であるが、母より口伝で膣の扱いに関して教わっていた。いまはその教えに従うのみだ。
少女の純潔を散らした快楽の余韻に浸っていた父さまが、おもむろに腰を動かし始めた。ゆっくりとピストンされていく彼の屹立には、千月のバージンを奪った証である鮮血が付着していた。
「パパさま……んあっ。ああんっ。パパさま、パパさまぁ」
痛みと快楽の狭間を往来する若い肉体から甘い声が漏れ出す。純潔を失ったばかりでありながら、

彼女はすでにメスとしての素質を開花させつつあった。破瓜の苦痛もなんのその、千月は父さまに満足いただくために彼のモノを締め付ける媚肉を蠢かし始める。その細い足を父さまの腰に絡めて、より男女の生殖器を密着させることで愛する男性の存在を胎内で感じ取ろうとした。

ヌチュ、グチという湿っぽい水音がリビングに響く。性愛を交わすふたりのそばに佇む柚姫がこっそり彼らの接合部を覗き込んでみると、しっかりと、はっきりと、おちんちんがおまんこのなかに埋まっている光景を確認できた。父さまのペニスが抜き差しされるたびに、千月の淫らな花弁が内へ外へと捲れたり、押し込まれたりしている。彼らの性器は千月の垂れ流した愛液にまみれ、テラテラと異様な光沢を帯びていた。まるで成熟した大人のセックスのようだ――と柚姫は思う。

父さまの眉毛が痙攣し始める。気持ちよくなっているのだ。リズミカルに腰を跳ねさせて自分の娘とおなじ年頃の少女の淫肉を、避妊具を装着していない生の男根で貪っている。

彼は千月の衣服のボタンを右手の指で乱暴に外すと、左のてのひらでふくらみかけの乳房を揉みしだき始めた。

ブラジャーさえ未装着の細い胴体がびくんと激しく震えた。恥ずかしげに膨らんだ彼女の乳首の尖端には汗がにじんでおり、艶かしく隆起していた。自慢の珠のような肌は父さまに揺さぶられるたびに上下に跳ねまくる。

成熟しきっていないとはいえ女性のおっぱいである。その双丘ははっきりと隆起して丸みを帯び、ぷるんと弾力を含んで父さまの指を歓迎した。父さまが左手で揉み、つねり、たくし上げるたびにその形状を変化させていた。父さまの人差し指が千月の乳頭をクリクリと捻ると千月が切ない吐息を漏らした。

「パパさまぁ。おっぱい、もっと大きくなりますからぁ、もっともっと、わたくしのお胸を存分においじりくださいませぇ」

父さまが口角を釣り上げると、ふと柚姫を振り返った。

きょとんとする実の娘へ向けて、含みのある笑みを浮かべながらとんでもない命令を発した。

「な、なんでしょうか、父さま――――え、あ……千月ちゃんのお顔のうえに、跨がれ……でございますか。あの、父さま。そのご命令は恥ずかし……も、申し訳ありません。仰せのままに」

かしこまって父の命令を耳を傾けた柚姫は、たまらずほほを赤らめた。

父さまに裸体をごらんいただくことには慣れている。しかし同年代の少女に、自分の秘部を目と鼻の先でまじまじと見られることを考えると、どうしようもないほどの羞恥心が湧き上がってきた。

しかし、性奴隷である柚姫にとって父さまの命令は絶対だ。

千月のとろけるような瞳をちらりと覗き込みながら、柚姫はさきほど千月がしたようにスカートの両端をたくし上げ、ゆったりとした仕草でクマさんパンツを脱ぎ捨てた。さらけ出された柚姫の恥ずかしい無毛の亀裂。日頃より父から性の寵愛を受けているにも関わらず、彼女の花弁は処女のそれも同然の、自然な薄桃色を誇っていた。

柚姫は躊躇しつつも、ソファーに寝そべって喘ぎ声を漏らす千月の顔にまたがった。千月の女陰を剛直で貫く父と柚姫は、自然と向き合う形となった。

「……ごめんね、千月ちゃん」

「……かしこまりました。パパさまがそうお望みでしたら、なんなりと」

顔に体重をかけないように気を使って中腰状態の柚姫の花芯に、千月が舌をあてがった。円を描くようにして柚姫の陰唇をまんべんなく舐めながら、千月は人差し指で彼女のクリトリスを優しく押しながら引っ掻くようにして摩擦していく。

父さまに秘所を貫かれている状態であるとはいえ、おなじ女性である千月にとって柚姫を堕とす

のは難しいことではない。千月は男根の抽送によってゆらゆらと上下に揺さぶられつつも、指と舌とで柚姫の性感帯を的確に刺激していった。
「ひっ……ふ、ふにゅうううう」
信じがたいほどの快楽が柚姫を襲う。
千月の攻めにはまるで容赦がなかった。膣口の数センチほど奥に存在するGスポットを探り当てて舌先で穿るように舐め、人差し指と親指で器用にクリトリスの皮を剥いて、指の腹で陰核の粘膜を激しく摩擦していく。女性との性交経験のない柚姫にとって未体験のテクニックだった。男性のような激しさを持ち合わせた、女性ならではの繊細な指と舌の運びに柚姫の精神が翻弄されていく。あまりの心地いい刺激に柚姫が軽いパニック状態に陥った。
「あああっ、こ、怖いですぅ。気持ちよすぎて、あ、あああっすごいですぅ。父さま、父さまぁぁ」
柚姫は父さまの命令に従いながら、向かい合う父の唇に自らの舌を這わせた。秘肉を割り裂いて青い果肉を愉しむ父の唾液は甘酸っぱくて、柚姫は泣きそうになった。なぜ泣きそうなのかは自分でもわからない。
と、柚姫の淫肉を弄んでいた千月が、甘ったるい声音で父へ告げた。
「パパさま。わたくし、もう生理が始まっております。このままわたくしの膣内で射精なされば、あなたさまの赤ちゃんをわたくしのお腹に宿せます……んんっはあ！　気持ちいいです……パパさま。どうぞわたくしのおまんこにあなたさまの精液を思うがままに注入なさってくださいませ。わたくしのすべてはパパさまのために。わたくしの子宮は、パパさまの赤ちゃんを宿し、育て、産むためにあるのですわ」
千月の甘い囁きが父さまの官能を直撃した。
彼の象徴はいまにも破裂しそうなほどに膨れあがり、少女の蜜壷のなかで脈動を繰り返す。射精の前兆――。
「パパさまのおちんちんがビクビクしていらっしゃいますわ。わたくしの子宮は、その逞しいモノでお作りになった赤ちゃんミルクを飲み込むことで、あなたさまの子供を身ごもれますわ。あなたさまがお望みであれば、いますぐにでも、あなたは千月を『あなたさまの赤ちゃんを孕んだ女』へと変えることができるのですよ……」
少女の魔性の囁きが父さまの獣欲を刺激したのだろう。
柚姫の父はラストスパートに入った。
男らしい腰が千月の陰唇を、まるで餅つきの杵のように激しく上下に打ち据えだした。雄の肉矢が少女の股座に幾度となく突き刺さるたび、白ばんだ蜜がヌチュクチュと卑猥な水音を立てる。千月の胸元の控えめな双丘がリズミカルに揺さぶられまくっている。
そんな千月の顔に跨る柚姫はたまったものではない。不規則に揺れ動く千月の薄い唇が柚姫の花弁を掠り、滑らかな舌が剥き出しのクリトリスを予想外の角度から舐めてくるため、もはや柚姫も気をやる寸前であった。
そこへ、とどめとばかりに千月の前歯が柚姫の陰核をコリリと甘噛みしたのだ。
「……っ！！　あああっ。きます、すごいのきますぅ、父さまぁぁぁ」
小さな肉体をさらおうとする切ない官能の波が柚姫の下半身を襲った。それは瞬く間に大きな津波となって少女の全身を痺れるような快楽の嵐で翻弄していく。陰唇からわずかに潮を吹かせて絶頂を迎える柚姫。全身に力が入らず、もはや身体を支えることさえ叶わない彼女は、千月を穿ち続ける父の胸元へしなだれかかった。
同時に千月も叫ぶ。

「パ、パパさまぁ、申し訳ございません、パパさまのおちんぽさまが気持ちよすぎて、わたくし、もう、もう……！　お許しくださいませ……はしたなくも先に達する千月をお許し……はあっ。あああああっ」

千月も同時に達する。父さまの分身を根元まで秘所に受け入れたまま固く瞳を閉じて、ガクガクと腰を痙攣させ始めた。男根を締め付ける媚肉がより圧迫感を増し、愛する男性の子種を欲するかのように激しく吸いついた。彼を悦ばせるために存在するような子作り器官の攻めが父さまの射精を決定づけた。

ふたりの少女が――それも実の娘、柚姫が性的絶頂によがり狂うという背徳の極みともいえる光景を前にして、ペニスが最後のうなりをあげる。千月の最奥に突き刺さったままの硬竿が脈動し、陰嚢が縮んで精巣が全力で精子を量産し続けている。薄い乳房を弄ばれながら千月は、パパさまの精子を受け入れるべく必死で膣肉を収縮させ続けた。千月にとって――早熟なる乙女にとっての最大の幸福は愛する男性の赤子を身ごもることなのだから、怖いものなどなにもないのだ。

父さまが千月の細い腰をがっしりと掴んで自分の腰と密着させた。がっしりとした男の腕力では、もはや千月がどんなに暴れようと膣内射精から逃れようがない。これでもう千月はスペルマを膣内に、子宮内に浴びる以外の未来が閉ざされてしまった。子作りのためのセックス。オスからメスへの種付け。父さまの眼球が情欲に血走り、千月の口元に喜悦の笑みがよぎった。

父のペニスが跳ね上がり、白濁液が全力で尿道を駆け上がっていき、父さまの腰がぶるるっと震えだして、

「父さまぁ……」

柚姫が涙に潤んだ瞳で父さまを見つめた。助けを求めるような、か細い声。

そのすがるような声音に、女色に狂って若い肉体を貪っていたその顔が、一瞬、憑き物が落ちたかのようにハッとなった。

柚姫は、泣いていた。

愛娘。十年以上の年月をともに暮らしてきた、もっとも身近な存在にして最愛の性奴隷。そんな彼女が、寂しげに涙を流している。

リビングに漂う好物のシチューの香りを、そのとき初めて父は意識した。

「父さまぁ……きゃっ」

いかなる心境の変化か、彼は膣内射精までコンマ数秒というところまできていたペニスを千月の蜜壷から引き抜くと、目の前に座り込む自分の娘を右腕で引き寄せて、彼女の顔に大量の白濁液をぶっかけた。

「わっぷ……と、父さまぁぁ、そんな、急に……はうううう。熱い、ですう……」

唐突に顔をスペルマで彩られた柚姫は、それでも嫌な顔ひとつせずに彼の子種を丁寧に指と舌とで舐めとっていった。少し高めの父の温もりを宿した樹液を味わいながら、柚姫は父のたくさんの精子たちが自分の口のなかで泳いでいる姿を想像した。自分の弟や妹の素が、いま、柚姫の口のなかにあるのだ。幸せそうな表情で自分のザーメンを口に運ぶ愛娘の有様を見て、父さまは満足げに彼女の頭を撫でてやった。

そんなふたりのやりとりを見て、千月は途方にくれたような面持ちでソファーに座り込んだ。彼女の秘裂から泡立った愛液がとめどなく滴っているが、そこに白濁液が吐き出された痕跡はなかった。

「パ、パパ、さま……どうして、わたくしめの膣内に射精をしてくださらなかったのですか。わたくし、初めてはパパさまのお情けを子宮で受けとめることが夢でしたのに……」

父さまは寂しげに呟く千月を見て見ぬ振りをし、ふと柚姫を振り返って口を開いた。柚姫はかしこまって、膝を正した。
「え……はい。柚姫がお口でお掃除フェラをするのですね。仰せのままに」
柚姫は二つ返事で快諾した。かつて〝友人のパンツをもってこい〟と父に命じられた際には泣きじゃくった彼女も、他者を傷つけるような命令でなければ躊躇なく従う。
父さまが体勢を変え、ソファーの背もたれに全体重を預けるようにして深く腰をかけた。柚姫はそのそばにちょこなんと座り込み、脱ぎ捨てられた彼のズボンと下着を手際よく折りたたんでから、大きく開かれた両足のあいだに身体を挟ませた。阿吽の呼吸でフェラチオの準備を整えた柚姫とパパさまの様子を、千月は床に座り込んだまま羨ましげに眺めている。
「それではご奉仕させていただきます」
柚姫はいつものように一言断ってから実の父親のペニスに両手の指を添え、いたわるような優しい仕草で上下にさすり始めた。射精したばかりで尿道内に残留していた精液の残滓が鈴口から溢れていくると、彼女は亀頭にキスをするような形でそれを舐めとっていく。鋭敏な男根を実の娘の手と舌で愛撫された父さまの背中が大きく震えた。
父の象徴を優しく包んだ柚姫の小さな両手がペニスの尖端から付け根、付け根から尖端へとピストンするたび、ゆっくりとではあるがペニスがふたたび大きくなりつつあった。まだ稚拙ながらもひたむきな実娘のテクニックが、父さまのペニスにほのかな熱を植え付けつつあった。ふたたび女を犯せるように復活しつつある男根を前にして、まだ男慣れしていない柚姫はほほを赤らめた。しかし彼の剥き出しの欲望から目を逸らしはしない。目を逸らすことは父さまに対して失礼にあたるから、自分のような性奴隷を肉体的に愛してくださるおちんちんを凝視しながら、一生懸命にシゴキつづけるのだ。
果てて間もないペニスに熱い血流が集まりつつあった。びくん、びくんと脈動するペニスを持て余した父さまは、床に座り込んでいじけている千月にとある命令を放った。
「……？　パパさま、千月にご命令でしょうか。はい、パパさまのためでしたらなんなりと。……
……。え、ええっと。柚姫ちゃんに、ご奉仕の手ほどきを、でございますか。は、はい。パパさまがお望みであれば」
どこか気乗りしなさそうな様子で千月がやおら柚姫の隣へ座り込んだ。
「柚姫ちゃん。パパさまのご命令だから教えてあげる。ちゃんと覚えなさいね」
高飛車な口調でそういうと、彼女は柚姫の右手に左手を添えて、一緒に父さまの肉棒を上下にさすり始めた。父さまのおちんちんを中心に挟みながら互いの指を絡ませ合い、
「あ、ありがとう、千月ちゃん」
「いいから。ほら、一緒に……しゅっしゅ。しゅっしゅ」
と呼吸を合わせて両の手をリズミカルに抽送する。彼女らの少女らしい柔らかな手のひらに摩られるたびに、父さまの尖端から透明の愛汁がにじみ出てきた。それは性奴隷の少女たちの指に絡みつき、混じり合って、ペニスと両手との摩擦を失わせていく。淫らな液体が、父さまをより気持ちよい高みへと誘っていく。
「父さま……では、そろそろお口でご奉仕させていただきますね」
いよいよ柚姫の小さな口が開いた。腕の上下運動を疎かにしないよう注意しつつ、歯を立てないよう気をつけて父さまの亀頭を薄い唇でついばんだ。ちゅっ、ちゅっと赤ちゃんのほほにキスを落とすような繊細さで父親の生殖器にエッチなあいさつをしてから、おもむろに父の肉竿の尖端を中心にして口内で肉圧マッサージしていく。父さまのペニスがびくんと大きく跳ねた。

その様子を観察していた千月がほほを膨らませて、
「そうじゃないでしょ。男のひとは射精したあとはおちんちんが敏感になってるから、あんまり亀頭ばかり攻めないで、なるべく竿とタマタマを労わるように摩るのよ。こんな感じれ……」
というと、千月は父さまの股間を慈しむように愛撫し始めた。半立ちのペニスの尖端に触れぬように、まずは竿の根元にむしゃぶりついて、甘噛みしながら唇をすぼめて竿肉を吸引し、ゆっくりと顔を上げてペニス全体を生暖かな唾液で浸していく。手馴れたもので、男性の性感帯を的確に攻めつつ、決して痛みを与えぬよう注意しながら父さまの官能のツボを刺激していった。
そんな千月からの手ほどきを受けた柚姫は、半立ち状態のペニスの尖端にじわりじわり舌を這わせると、そのまま滑らかな仕草で顔を上下させ始めた。ペニスをぎゅっと握り締めず、赤ちゃんと握手をするような強さでさすり上げつつ、父親の肉袋を舌の腹で大胆に舐めあげる。柚姫のよだれがべっとりと付着した肉袋を、さらに千月が丹念に舐めとっていく。
ふたりの少女によって挺身的な奉仕を施されるというダークファンタジーのような光景を、父さまはじっとりとした眼差しで見つめていた。
柚姫が人差し指と親指とで輪を作って屹立を摩擦すると、亀頭の尖端から透明な淫汁が溢れ出てきた。それを千月がすかさず唇をすぼめて吸い上げる。
徹底的な性器への攻めを受けて身の毛がよだつほどの快楽を覚えた父さまが、柚姫の頭を撫でた。
そのことが、父さまのなにげない気遣いが、いつも柚姫の胸に暖かな温もりを宿らせてくれる。
褒められることが嬉しくて、柚姫の口淫に更なる磨きがかかっていくのだった。
父さま。柚姫は上手になっていますか。
父さま。もっとたくさん気持ちよくなってください。

Illustrated by しかしょみん様

柚姫は祈りを込めて手淫に没頭した。自分のご奉仕によって父さまに気持ちよくなっていただくことが嬉しい。自分のご奉仕を大好きな父さまに悦んでいただけるように上達したい。千月の手ほどきもあって、柚姫の舌使いはさらにエッチに、成熟したものになっていった。

ふたりの少女が、ぷはあ、と大きく息をついて同時に熱い棍棒から唇を離した。男根の穂先から滴る愛液と少女らの唾液によって深く愛された父さまの猛々しい肉の柱は、いまや爆発寸前なまでに勃起していた。

柚姫も千月も、黒光りする秘刀から目を離すことができなかった。彼の心臓の鼓動に合わせてびくん、びくんと大きく跳ねるその肉棍によって、ついさっき千月の純潔は散らされたのだ。それが柚姫の顔に大量の樹液を吐き出しておきながら、すでに堂々たる復活を見せている。〝男性は射精後しばらく勃起ができない〟という知識を身につけていた千月は唖然としていた。

ふたりの少女の小さな手に男性器を愛されながら、父さまが柚姫に命じた。

「は、はい。なんでしょうか、父さま。……柚姫が父さまの上に乗るの、ですか。騎乗位、でございますね。はい、仰せのままに。ただちに準備いたします」

柚姫はふたつ返事をすると、己のスリットに指を当ててクリトリスを撫ぜた。父さまとエッチをする際には必ず花弁を濡らしておかないと、自分のみならず父さまにまで痛い思いをさせてしまうから、こうして自分を慰めることで愛液をまぶしておかないと、

――――愛液は、すでに分泌されていた。

驚いた。

気づかぬうちに柚姫の花芯は、しとどに濡れそぼっていた。

千月の舌技によって絶頂に達したことの加えて、愛する父のペニスを口と手で愛撫したことにより、柚姫の下腹部に仄かな熱が自然と生まれていたらしい。他者へ奉仕することで自分自身の官能性も高める――柚姫はこの若齢で性奴隷としての資質が開花し始めていた。

「んふっ……」

ラブジュースまみれの愛豆を擦ったために痺れるような甘い電流が柚姫の脊椎を犯していく。癖になるような快感だが、自分ばかりが気持ちよくなるわけにはいかない。

柚姫は恐る恐るといった風情で、ショーツのみならず残る衣服をすべて脱ぎ捨てたのち、ソファーに寝そべる父さまの上にまたがった。小柄な全裸の娘が、実の父親の性器にまたがるという背徳的な光景。

父さまは改めて柚姫の肉体を観賞した。

一糸まとわぬ――否、髪を結わえたリボンと、従属の証である首輪のみの姿になった彼女が、恥じらいを帯びた視線を父さまへと向けている。千月よりも若干成長が遅いものの、柚姫の乳房はすでに少女らしい膨らみを帯びており、覚えたての甘い快楽によってつんと尖った乳首の先端には、珠のような透明の汗が滴っている。さして肉付きのないお尻といい、くびれのない腰といい、いまだ成熟していない青い果実のような少女の肉体であった。

視線を落としていくと、大きく広げられた両足の付け根に無毛のスリットがあった。肌色の割れ目の狭間からは、薄く皮を被った小さな淫豆が顔を覗かせている。クリトリスが柚姫のもっとも敏感な性感帯であることを父さまは知っていた。クリトリスを攻めるとどのような声で娘が喘ぐのか、小さな顔を悦楽に酔わせるのか、毎晩のように見聞きしてきたから。

陰核のさらに奥には、女性にとって一番大事な場所――赤ちゃんを作るための生殖器が、可憐な花を咲かせていた。すでに父の男根を何度もくわえ込み、胎奥に精液を注ぎ込まれては青い快楽に咽び喘いできた、まだ小さいながら若干淫水焼けした少女の秘裂。今日に至るまで、実父のいきり

立った獣棒で欲望のままに挿し貫いてきた実娘の性器。父さまは彼女を肉体的、精神的に開発し、自分のものとして染め上げてきたことを実感し、ゾクゾクと背筋を震わせた。
柚姫は自分のもの――肉体的に成熟していない全裸の娘の首筋にハマる首輪は、その象徴であった。柚姫は命じられないかぎり首輪を外そうとしない。彼女が自らの意思で父さまのものであろうとしている証だった。
屋外では市役所のスピーカーが『ゆうやけこやけ』を奏で、柚姫と同年代の少女たちがリコーダーを吹きつつ家路をたどっている。柚姫はほほを赤らめつつ、無毛のクレバスを人差し指と中指で広げて、きれいな桃色の肉襞を父さまに晒した。自分の性器を露にすることはすごく恥ずかしいけれど、こうすると父さまが悦んでくださるのだから、柚姫に躊躇う理由はなかった。
ソファーに横たわったままの父さまの上に膝立ちになった柚姫は、大きく生唾を飲み込んだ。普段は柚姫が父さまに組み敷かれて足を開くケースが多く、あまり自発的に動かない。すでに幾度も父さまと肌を重ねているからといって、柚姫はセックスのテクニックに秀でているわけではないのだ。
父さまの瞳が、早くしろ、と急かしていた。
なかば破れかぶれになった柚姫が、広げたままの花芯に父親のおちんちんをあてがった。
胸がドキドキする。
これから父さまとひとつになると思うと、期待と、若干の不安とが入り混じった複雑な感情が柚姫の胸中を支配していった。深呼吸をする彼女の乳房が小さく揺れて、乳頭の尖端の汗が白磁のような少女の肌をつっと流れ落ちた。
柚姫は意を決して腰を下ろしていった。
くちゅう、と湿っぽい音とともに、父さまの象徴が淫肉をかき分けて柚姫の中心を貫いていく。父さまのアレが自分の秘所の深く深くへと侵入していくたびに、腰が抜けそうなほどの悦楽が柚姫の胎内に弾けていく。
ガクガクと膝を痙攣させつつも柚姫は下腹部を降ろしていった。鉄のように硬い父さまの淫棒が容赦なく実娘の生殖器を穿ち、欲望のまま彼女の聖地を犯していく。
柚姫の胎内で、父さまのペニスの尖端が最奥に当たる感触がした。30秒という長い時間をかけてようやく、父の亀頭と娘の子宮口とが密着したのである。膣内いっぱいに父の象徴を受け入れてなお、いまだ肉竿の四分の一は埋まりきらずにいた。
「い……いかがでしょうか、父さま」
息も絶え絶えに柚姫が父に尋ねた。経験の浅さのみならず、柚姫の小さな肉体に成人男性の生殖器はサイズが大きいため、男根を咥え込んだ膣肉がやや強引に押し広げられているのだ。柚姫は圧迫感の入り混じった快楽に翻弄されてしまっていた。
父さまは、そんな柚姫へ容赦のない命令をくだした。
「……う、動け、でございますか。腰を、このまま前後に、で、ございますね。仰せの、ままに。……んしょ、んしょ」
柚姫は健気にも父の剛直を飲み込んだまま、命じられたとおりに父親を愉しませるべく下腹部を揺さぶり始めた。しとどに濡れそぼったピンクの花びらと父の陰茎の隙間から、泡立った愛液が粘っこい音を立てて滴っている。
父さまが小さく息を吐き出した。その眉毛はだらしなく緩み、相貌もほころんでいるようだった。柚姫との情交の際にいつもみせるオスの表情だった。
「父さま……もっと、もっと柚姫の身体で気持ちよくなってくださいませ」

父さまの凶棒がお腹の内側を往来しているのを、柚姫は胎内ではっきりと感じ取った。固く逞しい父さまの性器が、自分の女の子の聖域をノックしているのだと想像すると、恥ずかしさとともに誇らしさのようなものが柚姫の胸に芽生えてきた。

自分はいま、父さまに悦んでいただいているのだ。

自分の肉体が、父さまのおちんぽさまを気持ちよくしてさしあげているのだ。

いつしか柚姫は、みずから望んで腰を動かしていた。父さまのおちんちんはまだ柚姫には大きくてちょっと苦しいけれど、すぐに成長して、おっぱいも大きくなって、もっと父さまにふさわしい性奴隷になりたいと思う。セックスだってもっとうまくなりたい。千月ちゃんのように。

父さまも柚姫の腰つきに合わせて、みずからの子作り棒を上下させ始めていた。互いに示し合わせたようにタイミングを計り抽送を繰り返す。

千月の人差し指が柚姫の菊座を貫いたのはそのときだった。

「ふあああああっ」

柚姫の背筋を経験したことのない不思議な快感が貫いた。菊座の周辺は男女ともに性感帯であり、かつて柚姫はそこを重点的に攻められたことがなかった。力が抜けていくような甘い痺れが柚姫の肉体を襲う。

千月の人差し指が柚姫のアナルをクリクリと愛撫したあと、膣側の腸粘膜を軽く擦った。

「柚姫ちゃあ～ん。パパさまとのセックスは、そんなに気持ちいいですかしらぁ？」

パパさまを奪い合うライバルの少女を半眼で射すくめながら、千月はアヌス攻めを強行した。爪を立てて肛内を傷つけないよう注意しつつも容赦なく人差し指を回転させたり蠢かせたりして、少女の弱い肉のツボを的確に突いていく。

お尻への刺激にはまったく慣れていない柚姫の背中が激しく仰け反った。同様に、父さまもうめき声をあげた。後孔に刺激を受けることで膣肉の締めつけが強くなったのだ。赤ん坊の乳吸いのごとき蜜壷の吸引が父のペニスを襲い、肉棒がびくんと痙攣し、柚姫の膣内でさらに膨れた。

「んんんっ……と、父さまぁ。お、大きいです……柚姫のなかで、父さまがもっと大きくなってますぅ」

柚姫の腰の動きは止まろうとしない。まだ大人になりきれていない膣肉が限界近くまで伸張されているにもかかわらず、ほとんど痛みはなかった。むしろ、おまんこに宿る痺れるような快楽が、柚姫の理性を焼いていた。

心のなかで〝父さまに気持ちよくなっていただきたい〟と〝自分も気持ちよくなりたい〟とが絡み合い、溶け合っていく。互いに快楽を貪り合うという、セックスの本質にして、本来あるべき姿――。

柚姫は父さまの愛棒を身体の奥底で味わいながら必死の思いで腰をシェイクし続けた。騎乗位による抽送はまだ年若い彼女にはハードな運動であり、そもそもまだ性行為に慣れてすらいないのだ。

柚姫の膣肉が父さまのペニスを貪るようにして蠢き始めた。彼の肉棒の形状にフィットするように膣粘膜が自在に形を変化させ、隙間なく吸盤のごとく密着してくる。父娘で幾度もセックスを重ねてきた結果、少女の美肉は柔らかくほぐれて父を悦ばせる妖花と化していた。

児戯にも等しい腰使いでありながら、しかし父娘ならではの肉体的相性の良さと、少女の良質な淫孔とが父親を官能の高みへと押し上げていく。

そこへ千月のアナル攻めによる締めつけが加わったため、父さまのおちんちんは精液を強引に搾られるも同然の環境にあった。父さまの生殖器がうねりを上げて、実娘の淫らな性孔のなかで細かな脈動を繰り返す。海綿体に限界まで熱い血潮が送り込まれた陰茎は、無垢なる少女の粘膜を存分

に味わいながら、実娘の胎を穿っていた。
父さまの熱を帯びた視線が絡み合うふたりの少女に釘付けになった。柚姫を肛虐する千月と、その攻めを涙目ながらに受け入れて肢体をよじる柚姫。まるでふたりが友人か姉妹のように、父さまには見えたのだ。
いつの間にふたりとも仲良くなったのか父さまが問うと、千月が驚いたような顔色で口を尖らせた。
「べ、別に仲良くなったわけではありませんわ。ただ、この子……柚姫ちゃんを見ていると、なぜか意地悪したくなってしまいまして」
父さまが含み笑いを浮かべた。
彼には千月の気持ちがよくわかった。おとなしく従順な柚姫を見ていると、つい意地悪をしてしまいたくなってしまうのだ。
「と、父さまぁ。柚姫は、お尻はまだ全然……んあああああっ」
千月の指先から逃れようとする柚姫の不規則な動きが、さらに父さまのペニスに享楽的刺激を与えてくる。
これはいい。
父さまは千月に更なる命令を上乗せした。
「わ、わたくしごときがパパさまのお口でご寵愛いただけるなんて……え。つべこべいわずに乗れ、ですか。しょ、承知いたしましたわ」
千月は気後れしながらも、ソファーに横たわる父さまの顔の上にまたがり、そっと腰を下ろしていった。
父さまの生暖かい舌が千月の花弁をちろちろと舐め回し始めた。さきほど破れたばかりの処女膜に舌が触れるたびに痺れるような痛みが走るけれど、それを果てなく蹂躙するほど胸が満たされている。
父さまの舌先が千月の膣内へと到達した。柔肉をかき分けて侵入してくる生暖かい異物の感触に、千月の唇から自然と甘い吐息が漏れ始めた。
蠢く舌が少女の秘所を舐め倒していく。犬が水を飲むようにして舌腹で可憐な肉の蕾を優しく摩擦していくと、いよいよ千月の青い性感に火が灯ろうとしていた。
「ん……あっ」
思わずみずからの乳房に右手を添えて揉みしだく千月。まだ成長過程にある控えめなおっぱいが少女の手の中で切なく弾んだ。張りのある肌に浮かぶ珠のような汗。ミニサイズの乳頭がぴんと尖がり、その尖端から透明な汗が滴っている。
「パパさま。千月はとても気持ちがいいです……」
千月がそう呟いたとき、ふいに父さまが小さく痙攣した。彼は千月の秘所から口を離して、満足げなうめき声を発した。
父さまの頭にまたがったまま千月が視線を上げると、男棒を狭い花芯で咥えこみながらはずみ車のように身体を揺すっている柚姫と視線が交錯した。
「いかがでしょうか、父さま。柚姫のおまんこ、気持ちいいですか」
息を切らしながら父さまが肯定すると、曇りがちだった柚姫の表情にほんの少し余裕が生まれた。
「よかったです……どうぞ、もっと柚姫の身体で気持ちよくなってくださいませ」
柚姫の小さな肉体が父親の上でリズミカルに弾む。その律動に合わせて父さまが、不意に腰を跳ね上げてきた。セックスのリードを柚姫に任せるといっていたにもかかわらず、自分でも動きたく

なったらしい。概して男という生き物は交尾の際に自分で動きたがる生き物である。
その予期せぬ行動が柚姫に混乱を招いた。
彼女自身の動きに加えて父さまが腰を突き上げるものだから、肉茎が少女の最奥を容赦なく抉り、激しくつついてくるのだ。これでは自分のペースを維持するどころではなく、父さまの調子に合わせて淫肉を蠢かせ、身体を上下させる必要が生じてしまう。小川の和流のような甘い快楽ではなく、押し寄せる鉄砲水がごとき凶暴な性感の奔流。
「はうっ……はうううう」
強すぎるほどの刺激に柚姫は泣きそうになった。お腹のなかが父さまのモノで膨れんばかりなのに、そこへ呵責のない抽送を繰り返されるため、微細な痛みと痺れるような甘い快楽とが柚姫の胎内で渦巻いている。
かといって父さまのためにも下腹部の揺さぶりや膣肉の締めつけを怠るわけにはいかない。柚姫はがむしゃらに、父さまに気持ちよくなっていただくために、その年齢にあるまじき淫猥な振る舞いで腰を上下させ続けた。父と娘の接合部から泡立った愛液が滴り、潤滑をよくしている。ヌラヌラとてかる男根が花弁に叩きつけられるたび、父娘の呼吸がより一層荒くなっていく。
足腰が立たなくなるほどの快楽に翻弄されながら、柚姫はまるで許しを請うように父の名を呼び続ける。対し、父さまは押し黙ったまま千月の淫肉を舌で弄びつつ、柚姫の青い肢体を堪能していた。

Illustrated by ＳＵＫＥ様

ぬちゅっ。ぐちゅぃ。ちゅぽ。
ひどく粘性の高い水音を立てて、父と娘の生殖器が深く浅く結合を繰り返す。避妊具を装着していない生の男根が少女の膣粘膜に擦りつけられるたび、得も言われぬ快楽がふたりの背筋を走り抜ける。父の鈴口からとめどなく透明な愛液が分泌され、柚姫の蜜壷を妖しく潤していった。

車輪が回転するようなハイペースで父のペニスが抜き差しされることで、柚姫の下腹部――おへその下あたりの肌が、膨らんだり凹んだりしている。一等親である実父の生命の根が、かくも凶暴に実娘を犯しているのだ。

そんな冒涜的であり、それでいてどこか神聖な光景を、千月は押し黙ったまま見ていた。

父に女陰をえぐられて快楽に咽ぶ娘と、娘の柔肉に肉棍を包まれていまにも果てそうな父。割り込みようもないほどに完成された近親相姦（ふたり）の関係を眺める彼女の胸の底に、熱いシコリが生じたのはなぜだろう。

父の性愛に喘ぐ柚姫の顔を正面から見据えながら、千月はおもむろにその唇を彼女の顔へ近づけて囁いた。

「ずるいよぉ。柚姫ちゃんばっかり」

不意を打つようにして千月は、よだれを垂らして喘ぐ柚姫の口元に薄い唇を覆い被せた。

「……！？」

千月の艶かしい舌が柚姫の口内を這いずり回り、歯茎を裏側から犯していく。小さな唇と唇とが密着し、唾液同士の交換が始まった。唇に柔らかなキスを浴びて、柚姫は蕩けるような心地よさを覚えた。それは安心感にも似た感触であった。お尻への攻めといい舌技といい、同年代のはずの千月はどうしてこんなにも上手いのだろう。

千月はそのまま、柚姫の剥き出しなおっぱいに両手を伸ばした。恥ずかしげな双丘が千月の愛撫を歓迎するかのようにぷるんと淫らに揺れ動く。千月の指に桃色の突起を弄ばれながら、柚姫は「あっ……」と切ない吐息を吐いた。

少女の乳房を揉みしだく千月の手のひらが、控えめな双丘を通じて張り裂けんばかりの鼓動を感じた。

柚姫の心臓の高鳴りがわかる。乙女の肌に宿った微熱を感じる。不思議な情動に突き動かされるまま、千月は柚姫の乳房を弄りつつ上ずった声を発した。

「ドキドキしてるね、柚姫ちゃん。パパさまに犯してもらって興奮してるの？　お父さんと避妊もせずにエッチなことして、胸が高鳴ってるの？　知り合ったばかりの女の子の前で実の父親とひとつになっているところを見られて、こんなに濡らしちゃってるんだぁ。この年齢で男のひとといっぱいエッチなことして――しかもそれが実の父親だなんて。柚姫ちゃんって、変態さんなんだね」

図星をつかれた柚姫の顔が火照った。

自分たち父娘が一般常識からかけ離れていることをしていることは、まだ大人になりきれない柚姫も肌で感じている。こんなこと友達にも言えないし、近所のひとにも絶対に知られてはならない。父さまのエッチな要求に答えて指で、口で、素股で、おまんこでペニスに触れるたび「自分は普通の女の子ではないのではないか」という疎外感にも似た不安に駆られることがある。

そしてその陰を差す不安のなかに、一抹の興奮が紛れていることも拭えない事実であった。

拙いテクニックであるにも関わらず父さまに射精していただいたとき、愛する男性に悦んでもらえたという矜持と達成感に包まれるのだ。普通の女の子には不可能な方法で父さまに恩返しできているという誇りが、まだ若い柚姫の心に芽生えつつあった。

父さまから意地悪な要求をされることもあるけれど、それもひっくるめて柚姫は父さまを愛しているのだ。

そんな柚姫の胸中を見透かしたかのように、千月が苦笑を浮かべた。

「ほんと……妬けちゃう」

そういうと千月は柚姫の陰部へと指を伸ばし、少女のスリットを親指と中指で押し広げてからク

リトリスを人差し指でクリクリと愛撫した。もっとも敏感な肉豆を優しく刺激された柚姫は「ひゅうっ」と息を飲んで思わず背中を丸めた。その仕草によって下腹部に更なる圧力が加わり、いよいよ膣圧が増した。

父さまの肉棒を八方から揉みほぐす少女の淫肉がきゅうきゅうと微細に痙攣を起こし、愛する男性を絶頂へと導こうと、父の遺伝子液を絞り出そうとして身悶えする。この年齢にして柚姫の肉体は男性に悦びを与えられるまでに成長していた。

ひく、ひくと柚姫の肉体が小さく痙攣を始めた。エクスタシーの予兆である。

襲い来る快楽の荒波に翻弄されつつ、それでも柚姫は腰振りをやめようとしなかった。もう足腰が抜けかけているにも関わらず、蜜壷の締めつけを継続しながら父さまのペニスの抽送を繰り返す。

すべては父さまに悦んでいただくために。自分が気持ちよくなるのではなく、愛する父親に気持ちよく射精していただくためにご奉仕をするのだ。下腹部の奥底から湧いてくる性愛への期待をあえて封じ込めつつ、柚姫はしゃにむに父の長筒に体重を預けた。

そして、自分の上で狂愛を演ずるふたりの少女たちの痴態が、いよいよ父さまのペニスを噴火へと導こうとしていた。

びぐっびぐん、と父さまのペニスが膣内で激しく身悶えするのを粘膜で感じ取った柚姫は、それが射精の兆候であることを悟った。もうすぐ、父さまの赤ちゃんの種がおちんちんからいっぱい放出されるのだ。

男性の生理についてまだ熟知していない柚姫は、父さまが達するたびに慌ててしまうことがある。射精とはなんなのか。どうしておちんちんからあんなにも勢いよく赤ちゃんの種が発射されるのか。パンパンに腫れたペニスから粘ついたザーメンが飛び出すたびに、柚姫は男という性に畏怖の感情を覚えさえした。

生臭く粘っこい白濁液をどうしても飲み込めずにベソをかいて叱られたこともある。いまだって精飲はなかなか慣れることができないのだ。

それでも、父さまが望むなら、柚姫はどこででも父さまの精液を――。

「ふぁう……父さま、今日はどこへ射精、なさいます、か」

腰振りを継続する少女の懸命なる質問を受けて、柚姫の父は、なんの迷いもなく柚姫の――実の娘の胎内に自らの子種を注ぎ込むことを宣言した。

柚姫が、にっこりと笑う。

「……は、はい。柚姫の膣内に出してくださるのですね。どうぞ、存分に、柚姫の初経前のおまんこに膣出し、してくださいませ。柚姫、もっとがんばりますから……もっと父さまに気持ちよくなっていただけるように、いっぱいおまんこ締めつけます。柚姫の子宮で父さまの精液を全部、受け止めますので、たくさん、いっぱい、お射精なさってください。柚姫の子宮は、父さま専用なのです。いまはまだ小さいから無理ですが、将来、赤ちゃんが産める身体になっても、いまのように父さまの赤ちゃんの素をたっぷり注いでいただいて、父さまの赤ちゃんをお腹に宿して……父さま専用の性奴隷を産むのが柚姫の夢なのです。ですから父さま……柚姫のおまんこに、たっぷり種付けしてくださいませ。少しでも早く生理が始まって父さまの赤ちゃんを妊娠できる身体になれるよう、父さまのザーメンで満たしてください」

真摯な、そしてはかなげな娘の笑顔を見た父さまは、おもむろに彼女のふとももに両手を置いた。

驚き顔の柚姫に説明もなく、不意に彼はブリッジをするようにして下半身を仰け反らせた。

父さまが腰を突き上げるたび、柚姫の肉体がバネ細工のおもちゃのように跳ね上がる。その弾みで柚姫の矮躯が一瞬、宙に浮いたようになり、濡れそぼった花弁から獣槍がズルルルルッと抜け

かけた。亀頭の傘が膣肉をひと思いに抉る感触が、柚姫の性感をじんと熱く滾らせた。
嬌声をあげる柚姫の肉体が重力のままに落下すると、抜けかけたペニスが容赦のない勢いで最奥まで貫いた。
「ふにゃあああああっ」
あまりの強い刺激に柚姫が子猫のような泣き声を上げると、いよいよ父さまがラストスパートに入った。
ソファーに寝そべったまま強引に背中を仰け反らせることで腰を突き出して、柚姫の生殖孔を剛直で挿し貫く。父さまの亀頭のカリは少女の淫肉を容赦なく抉り、互いに精神が蕩けるほどの快楽を与えていく。
そのあいだにも父さまは、自分の顔にまたがる千月の花弁を舌先と唇とで入念に愛撫していた。千月の粘膜は甘い愛液を滴らせながら、愛するパパさまの口淫を受けていまにも気をやりそうなほど快楽のパトスがせめぎ合っている。
と、父さまの前歯がミニサイズのクリトリスを甘噛みしたとき、千月が激しく身悶えした。その一撃が千月を絶頂へと誘った。
「パ、パパさまああっ。はあああ、うううううっ」
がく、がくんがくんと狂おしい痙攣が千月の全身を襲う。
眉根を寄せてエクスタシーを迎えた千月の花弁から少量の潮が吹き上がった。透明な塩水が父さまのアゴを直撃すると、千月はそのまま脱力してソファーのヘリに寄りかかり、「んーっ。んうーっ」と小刻みに震えながら官能の荒波に身も心も浚われていった。
その様子を流し目で確認した父さまは、柚姫の肉体を心ゆくままに貪るべく彼女のふともも を固定させたまま何度も何度も腰を突き上げた。その都度、愛娘の小さな肉体が軽く跳ねては落下して、剛直が少女の肉襞を掻き分けて抽送される。玩具のように扱われる柚姫としてはたまったものではない。
「んあっ。はあっあう！　ああああっ、と、父さまあああっ」
少女の瞳から一切の余裕が消え去り、父の名を泣き声で呼んだ。
その声に興奮したのか、父さまの動きがさらに凶暴になる。自分と血の繋がった娘相手とは思えない獣じみたピストンを、その小さなお尻に叩きつけた。男女の結合部から愛液が飛び散り、ぐちゅ、ぱちゅと水っぽい音が鳴り響く。
いまの柚姫は、父親の両腕で体位を固定させられるという膣内射精から逃れようのない状態にあったが、それでも必死に身をよじって身体を揺さぶり続けた。
無論、逃げようとしているのではない。父さまの律動に合わせて腰を動かすためだ。呼吸を合わせて膣肉を蠢かすことで一層父さまのおちんちんに気持ちよくなっていただこうとして、柚姫は不慣れながらも秘孔の収縮を試み続けた。足の付け根に力を込めて、お尻の穴を窄めるようにしておまんこの締めつけを強く……。
ダメだった。
父さまから与えられる快感がすごすぎて頭のなかが真っ白になってしまい、おまんこを締め付けるどころではなかった。父親のピストンのペースが速く、柚姫は肢体を揺さぶられるままになってしまっていた。
にも関わらずである。
柚姫が父から電撃じみた悦楽を与えられる都度、彼女の生殖孔は脊椎反射のごとく自然とその門扉を閉じようとしていた。ただでさえ狭い淫壷が括約筋によってさらにきゅうきゅうと圧迫され、

父のペニスをくまなくマッサージし、吸い付いてくるのである。
それはオスの射精を促すためメスに備わった機能であり、愛する父に悦んでもらうための娘の本能であった。気持ちよくしてもらった分だけ相手を気持ちよくするという、交尾の理想の形――。
この年齢にして柚姫の肉体は、父の手によって素晴らしいメス奴隷として開発されていた。
その名器とも呼べるほどの締めつけ、吸い付きを堪能する父さまが、ついに白い歯を剥いて最後の一突きをし、娘の肢体を抱きしめた。
父の怒張が淫肉を一気に割りさいて、柚姫の胎のもっとも深いところまで潜り込んだ。
ふたりの視線が交錯する。
父の肉茎がびぐっびぐんびぐんと踊り狂うのを柚姫はまだ未成熟な肉のトンネルで感じ取った。
性に対する緊張。メスの悦び。慣れない快感。そして漠然とした不安。
様々な感情によってぐちゃぐちゃな心境のまま、柚姫は涙に潤む瞳で父を見つめて「父さま……」と呟いた。
その一言が、父親のサディズムをモロに刺激した。
柚姫を犯し、膣内射精し、自分の色に染め上げる。実の娘を自分のモノにするという、ケダモノのような本能が一瞬、父さまの心を支配した。精巣がフル稼働し、大量生産された活きのいい精子たちが尿道を駆け上ってくる感触。かつてないほどの快感が前立腺を震えさせていた。
柚姫。
赤ん坊の頃からともに暮らしてきた愛しい家族。
血の繋がった実の娘。
犯すべき、愛すべき性奴隷。
父さまが吠えた。
彼はその剛直を娘の奥深くに埋め込んだまま、射精を開始した。
限界まで勃起した陰茎から飛沫き出される白濁の樹液。凄まじい速度で尿道を伝って駆け上るハチミツがごとく濃厚で粘ついた実父の遺伝子ザーメンが、びゅぶるるると音を立てて尿道口から噴出し、柚姫の膣内に吐き出されていった。見る見るうちに白濁液で満たされていく狭い蜜壷。
柚姫が大きく背中を仰け反らせた。軽い絶頂に襲われた彼女は、それでも死に物狂いで父さまのペニスを締め付けようとする。痙攣しつつきゅうきゅうと密着する膣肉が恐ろしいほどの快楽を肉竿へと与え、それがさらに激しい射精を促していく。阿吽の呼吸で絶頂を迎え合うオスとメスの生殖器。
大量に流し込まれた精液はすぐに行き場を失った。柚姫の小さな花弁を限界近くまで押し広げて穿たれた父さまの剛直はいまや肉の栓と化し、精液の逆流を食い止めていた。
「あ……温かいです。父さまの精液が、柚姫のお腹のなかに、びゅっびゅって出てますう」
いま、自分の胎内に吐き出されている粘液が赤ちゃんの種であることを柚姫は知っている。女性の子宮内に注入することで新しい生命を芽生えさせる魔法のような液体。父さまの遺伝子の半分が、いま、実娘の柚姫の膣内に容赦なく注ぎ込まれているのだ。
父さまのおちんちんが小刻みに膨らむたび、亀頭の尖端から弟妹の素となる種が激しく噴出していることを、柚姫は未成熟な子宮の入口で感じていた。とぷん、とぷんという心臓の鼓動のような感触が、少女のお腹のなかに刻まれていく。
父さまの射精が止まらない。胎内の圧迫感がちょっとずつ強くなっていく。父さまのザーメンが膣内に満たされつつあった。二度目の射精とは思えないほど精液の量が多く、柚姫の未熟な女性の器官ではすべてを受け止めきれそうになかった。

こわい。子宮が溺れてしまう。
そのとき柚姫の膣肉を内側から押し広げていた水圧が、不意に霧散していく感触があった。圧迫感がなくなって女壷が楽になり、柚姫の不安も掻き消えていく。
同時に、父さまの亀頭が密着している子宮口のさらに奥でなにか温かなモノが一斉に流れ込み、お胎の中心に粘ついた温もりが広がっていった。
「あ……」
柚姫は本能で悟った。
父さまの精液が、自分の子宮へと流れ込んできたのだと。
女の子のもっとも神聖な場所――赤ちゃんを作るためのお部屋に父さまのおたまじゃくしたちがたくさん侵入して、実娘の柚姫を妊娠させるために元気に泳ぎ回っているのだと。
そして実感する。
父さまは、柚姫が妊娠してもおかしくない行為をしていると。
柚姫の膣内で最高に気持ちのいい射精をおこないながら、実娘の胎内に赤ちゃんの種を植え付けているのだと。
そう。いま柚姫と父さまがしているのは、近親相姦による子作りなのだ。
子作り。オスとメスが肉体を交わらせて新たな生命を育む、性の営み。それをもっとも禁忌とされる、もっとも濃厚な血縁者である実の父娘で実行しているのだ。
お腹のなかでポコンとあぶくが立つような感触がした。父さまの射精はいまなお続いている。もし柚姫が赤ちゃんを妊娠できるほどに成長していたのなら、間違いなく身ごもってしまうであろうほどの量の樹液がどんどん注ぎ込まれている。
「……」
父のスペルマの温もりを胎内で味わいながら、柚姫はそのとき心の底から、自分が女だということを実感した。男のひととセックスをして精液を――たくさんの精子をお腹のなかに受け入れれば赤ちゃんを宿すことができる性別。
父さまにエッチなことをしていただき、悦んでいただくことができる女の子として生まれてきたことを、柚姫は嬉しく思った。父さまの娘として生まれてきたからこそ、こんなにもいっぱい父さまに愛していただけるのだ。
そして、その一方で。
もし自分に生理が始まっていたら、父さまの赤ちゃんを妊娠したのだろうか、と柚姫は思う。
正直、妊娠は怖い。
柚姫は肉体的にも精神的にもまだ大人になりきれていないし、お腹が大きくなると学校へも通えなくなってしまう。お友達とも当分のあいだ顔を合わせられなくなってしまうし、なにより〝赤ちゃんを産んで育てる〟という人生を左右するイベントと向き合うだけの心の準備が、いまの柚姫にはできていない。
もしも、万が一、いままさに膣内で存分に撒き散らされている父さまの子種によって、自分の子宮で生まれたばかりの卵子が受精したら――と思うと、貧血にも似た感覚を覚えてしまうのだ。
妊娠したら、どうしよう。
千月ちゃんは生理が始まっているのに父さまに膣内射精をせがんでいた。それは、心から父さまを愛しているからなのだろうか。
自分は心から父さまを愛しているといえるのか。おまんこに精液を浴びるたびに取り留めのない不安を覚えてしまうというのに。

自分に足りないのは覚悟だ、と柚姫は察した。
どぷんっ。ぶびゅびゅっ……びゅるっ……。
はち切れんばかりに勃起していた父さまの亀頭が、柚姫の肉筒のなかで徐々に柔らかくなっていく。長かった射精もようやく終わりのときを迎えようとしていた。
柚姫は父さまに許可をもらってから、おもむろに腰を上げていった。
実娘に思うがまま種付けした父さまのペニスがゆっくりと抜かれていく。膣出しの余韻に浸るかのように細かくヒクつく肉棒がずるりと音を立てて柚姫の花芯から姿を現していった。父の亀頭のカリが膣粘膜に擦れるたび、柚姫の下半身を鋭い快感が貫いていく。柚姫も絶頂を迎えたばかりで、うまく力が入らないのだ。
愛液まみれの男根がすべてさらけ出されると、亀頭の尖端――尿道口と、柚姫の花弁とのあいだに白濁液の橋がかかった。どれほど大量の樹液を注ぎ込んだのだろう、柚姫が腰をあげるごとに泡立った粘液がダボダボと漏れて、父さまのペニスに滴っていく。そんな、実父の精液が実娘の小陰唇から溢れ出てくるという、世間の倫理では決してあってはならない光景を、千月は羨ましそうな面持ちで見つめていた。
ふと、柚姫と父さまの目があった。
父さまは、本当に気持ちよさそうに、肩で息をしていた。
いい子だ――と告げて、父さまは苦笑いを浮かべながら柚姫の頭を撫でた。それは、父さまが心から満足したときにだけ見せる笑顔だった。
そして、いつのまにか瞳に涙さえ浮かべていた柚姫は。
「……ぐすっ。お褒めくださりありがとうございます、父さま」
これでいいんだと思う。
さきほどまで柚姫の胸中を侵食していた妊娠への不安は、いつのまにか掻き消えていた。
父さまのためなら、妊娠だってできる。
不安を拭いきれないけれど、父さまが望むなら、父さまの赤ちゃんを身ごもってもいい。友達を自分とおなじ性奴隷の道へ誘っても構わない。
これから自分たちがどうなるのかわからないけれど、いつまでも、父さまと一緒にいたいと思う。
はかなげな微笑を浮かべて、柚姫は心からの言葉を絞り出した。
「父さま。柚姫のなかにいっぱい出してくださり、ありがとうございました」

濃厚だったエッチが終わると、父さまの勧めで三人仲良くシャワーを浴びる運びとなった。
柚姫と千月が水かけっこをしたり、父さまの背中を流したり、ひとつの家族のような穏やかな時間を過ごしたのち、三人は晩餐をとった。
柚姫の温めなおしたシチューをみんなでローテーブルを囲んで美味しく頬張ったころには、すでに広い空は宵闇に包まれていた。星はさざめくような銀色の輝きを放ち、重たげな紫色の雲が西風に乗って流れてくる。公園で遊んでいた子供たちはとうに家路につき、柚姫たちとおなじく夕食にありついているころだろう。
食事中、柚姫たち三人は押し黙ったまま食事を口に運んでいた。千月も父さまも、暗黙の了解とばかりに会話のひとつも交わさなかったけれど、不思議と閉塞感はなかった。
柚姫としては千月へ質問したいことがたくさんあった。しかし、それを口にしてはならないような、どこかしんみりとした空気が食卓に漂っていた。それに柚姫が質問したところで千月が素直に

答えてくれるとも思えなかった。
ただ。
自分の目の前で父さまと情交を結び、自分をライバル視している目の前の少女に対して、柚姫は悪い感情を抱かなかった。一緒にセックスをしていて感じたのは、千月が必死で父さまに愛されようとしている、というひたむきな想いだったから。
「パパさま」
そのとき、千月が沈黙を破って言葉を発した。
食事が終わると千月は上品な振る舞いで口元をナプキンで拭ってから口火を切った。
「パパさま。わたくしの身体をご満足いただけましたか。わたくしが、パパさまのおそばにいることをお許しいただけますか。わたくしを、パパさまの家族に……」
それはどこか切羽詰まったような、深刻とも取れるほどに沈んだ声音だった。まるで父さまから拒絶されたら生きる希望を絶たれてしまうかのように。
柚姫が父さまを見上げると、父さまはアゴを人差し指で掻いたのち、厳かに告げた――「同居は許さない。だが、ときどき遊びにくることは構わない。柚姫にセックスについてもっと手ほどきをしてやりなさい」と。
そして、彼は、やおら千月の柔らかな髪に手を乗せ、前後に撫でた。父さまが柚姫以外の少女に対して頭を撫でる姿を、柚姫は初めて見た。
「あ……」
たったそれだけの仕草が、この瞬間まで張り詰めていたであろう彼女の緊張を解したらしい。
千月は顔をくしゃくしゃにして破顔すると、口元を押さえて涙目になった。
千月は柚姫と同年代で、まだ、大人になりきれていないのだということを、柚姫はいまさらながらに悟った。
強がりの仮面が剥がれ落ちた少女は、泣きじゃくりながら独白する。
「恐ろしかったんです。あなたさまに嫌われることだけが。あなたさまに認められず、母のように一度もあなたさまに抱いていただけず、関心さえもたれないことが。母はいっていました。〝自分があのひとに愛してもらえなかったのは、すでに自分が別の男に抱かれて汚れていたからだ〟と。だから母は、自分にできなかったことをわたくしに託してくれたんです。あなたさまのことは母よりたくさんきいていました。あなたさまの性癖も、好みのタイプもすべて。この服もあなたさまの趣味に合わせてオーダーメイドしたものなんです。このヘアスタイルも、エッチの技術も……」
しゃくり上げながら話す少女の言葉を耳にして柚姫は、おや、と思った。
千月ちゃんのお母さんは父さまと一度もエッチをしたことがないのだという。ということは……。
「ねえ、千月ちゃん」
「……なによ」
言葉をかけられた千月は、口をへの字に曲げて柚姫と向き合った。
そして、まだ人間の感情の機微にうとい柚姫は、千月のプライドを逆撫でする質問を平然と口にしてしまった。
「どうして父さまのことを〝パパさま〟と呼んでいたのですか」
千月は機関車のごとく頭頂部から湯気を沸騰させて柚姫のほっぺたをむぎゅうぅぅっとつねり、
「パパが欲しかったからよ！　悪い！？」
「いひゃい。いひゃいれふ、ひるきひゃん」
じゃれあうふたりの少女を見て苦笑を父さまが漏らした。

処女でありながら母の手ほどきによってセックスのテクニックに秀でていた千月。
すでに生理が始まっているにも関わらず、迷いなく膣内射精をねだった千月。
それは、どんな人生なのだろうかと柚姫は思う。
この年齢にしてひとりの男性のため一心に、ひたむきに己のすべてを捧げられる千月の人生は、同年代の少女よりもずっとずっと強く、気高く、孤独で、濃厚なものなのかもしれない。性奴隷というおよそだれにも語れず、だれからも理解されない茨道を自ら歩む千月の精神年齢は、きっと自分よりもずっと高いのだろう。
千月を成長させてきたものこそが〝覚悟〟なのかもしれない。
ひとしきり涙をこぼしたあと、目元を拭った千月が赤い瞳を細めて笑顔を浮かべた。
「いつか……」
小さな、しかし凛とした声音。
「いつか、パパさまの本当の娘としてお家においていただき、いっぱい、いっぱい愛していただくのが千月の夢です。それまでもっとエッチの技術を磨いて、女を磨いて、出直してきます。また近いうちに、遊びにきます。そのときには柚姫ちゃんにエッチなことをもっとたくさん教えてさしあげますね」
そういうなり千月は颯爽とした仕草でスカートの裾をつまむと左足を後ろへ引き、柚姫が惚れ惚れするほどに優雅な仕草でふわりとお辞儀をしてみせた。

父さまに送られて千月が去ったあと、食器を片付けていた柚姫のスリットが不意にじわりと湿り気を帯びた。父さまに膣内射精していただいたたくさんの精液が逆流してきたのだ。濃厚なザーメンが柚姫のショーツに付着してべとついている。
慌てて股間とショーツをティッシュで拭おうとした柚姫は、膣内から滴り落ちるどろりとした父の樹液の感触に対して不思議な感傷を抱いた。
柚姫のおなかのなかにはいまも、父さまの元気な精子たちがたくさん泳いでいるのだ。そしてそれらは柚姫の卵子と交わることなく死んでいく。なにしろ柚姫にはまだ生理が始まっていないから、父さまの赤子を身ごもることができないのだ。
思う。
いつか自分も、父さまから膣出ししていただいて悦ぶことができるようになるだろうか。
自分の胎内に放出された弟妹の素を愛おしく感じ「がんばってわたしの卵子と受精してね」と応援できるようになるだろうか。
父さまとの赤ちゃんをおなかに宿すことに幸せを感じられるようになるだろうか。
千月ちゃんにはできるだろう。千月ちゃんは父さまのことをあんなにも愛していたのだから。
――だから。
柚姫にもできないはずはないのだと思う。
だって、柚姫と父さまとは毎日寝食を共にして、おなじ時間を過ごし、身体を重ねている父娘なのだから。
柚姫は父さまの血が流れている実の娘なのだから。
柚姫はおまんこをティッシュで拭いかけた手を止めて、ショーツのみを綺麗にしたあとティッシュを片付けた。そして、セックスの最中そうするように膣肉をきゅっと締めて、なるべく生殖孔を狭めるようにした。

父さまの精液をこぼさないようにしよう。
万が一、いまこの瞬間に柚姫の卵巣が排卵したとき、父さまの精子たちが柚姫の娘卵子と受精できる確率をちょっとでも上げられるように。少しでも父さまの温もりの逃がさないように。

この日、柚姫は自らの足で、近親相姦の茨道へと後戻りできない一歩を踏み出した。

～Fin～

©2013-2016 箱庭遊戯
E-mail　：hugh.yuzunikki@gmail.com
Web site：http://hakoniwa-yuugi.jp
※無断転載、複製、違法なアップロードを禁止します。